時「サルヂニヤ」ノ國力ト之レヲ圍繞スル國際配合トヲ以テシテハ、右以上ノ好成績ハ到底贏チ得ラレナカツタト思ハレル。無論講和會議ニ善處スル爲メ萬策ヲ講シテ置ク必要ノアルノハ云フ迄モ無イコトデ、倫敦宣言加入ガ日本ノ地歩ヲ安固ニシタノハ言ヲ俟タヌガ、加入ニ際シテ取付ケテ置カネハナラナカツタ最重要ノ二件ハ有耶無耶ニ葬ラレタ、此二件トハ講和會議ニ於ケル我對等無虧ノ發言權ノ確保ト我主張援助ノ豫諾トガ夫レデアル、後者ニ就テハ其後幸ニ缺陷ヲ補フ機會ヲ促ヘルコトガ出來タガ、前者ノ遺漏ハ好機既ニ去ツテ再ヒ口ヲ開クニ由ナク、事件毎ニ落伍セヌ樣深甚ノ注意ヲ拂フ一方、倫敦宣言ニ藉口シテ對等ノ發言權ヲ主張スルニ努メタニモ拘ラス、講和會議ノ討議ガ最高潮ニ達シタ時、夫ノ四頭會議ノ出現ヲ見ルニ至ツタノハ頗ル殘念千萬デアル。

第二十一章　我講和基本條件ノ豫諾

「ボールス」號事件

世界戰爭中我國ノ取扱ツタ海上捕獲事件ハ其數極メテ少ナク、又興味アル問題モ無カツタガ、只「ボールス」號事件丈ケハ多少紹介ノ價値ガアル樣ニモ思フカラ、其梗概ヲ述ベルコトニスル。

「メキシコ」駐劄獨逸公使「フオン、ヒンツエ」氏ガ支那ニ轉勤ヲ命ゼラレ北京ニ赴任スルカラ通交狀ヲ貰ヒ度イ、ト大正三年十一月米國々務省ニ申出タノデ、同省ハ之レヲ珍田大使ニ取次イダ、然ルニ獨逸ハ支那デ盛ンニ反日政策ヲ執ツテ居ルシ又「フオン、ヒンツエ」氏ハ海軍少將デ辣腕ノ聞エガアルカラ其北京入リハ決シテ歡迎スベキデナイ、故ニ我國ハ途中ノ安全ヲ保障スルコトガ出來ヌト回答シタガ、幾何モナク同公使ハ瑞典ノ貨物船「クリスチアン、ボールス」號ニ乘ツテ支那ニ向ツタトノ情報ニ接シタノデ、此船ハ多分燃料補給ノ爲メ我國ノ一港ニ立寄ルダラウト思ヒ、其時ノ臨檢等ニ關シ內務省ニ照會シテ置イタガ、イツノ間ニカ上海ニ着イテ「ヒ」公使ハ上陸シテシマツタ、段々調ベテ見ルト「ボールス」號ハ唐津ニ堂々ト入港シ、半日碗泊シテ石炭ヲ積込ンダ上出帆シタトノコトデ、內務省カラハ長崎等大キナ港ニハ豫告シタガ、唐津ノ樣ナ所迄ハ照會シナカツタ爲メ、土地ノ警察等ハ何ニモシラズ此醜態ヲ演ジタノダソウダ。此船ハ日露戰爭中ニモ露國ノ爲メニ戰時禁制品ヲ輸送シタ事ガアリ甚ダ心外ニ感ジテ居タ所、更ニ容疑人ヲ乘セテ室蘭

ニ向ケ上海ヲ發航シタトノ情報ヲ得タノデ注意シテ居タラ、又唐津ニ立寄ツテ神戸ニ入港シタカラ、龍田艦ガ之レヲ拿捕シテ佐世保ニ引致シタ、同地ノ捕獲審檢所ハ大正四年二月二十四日船長ヲ訊問シ傭船契約書其他ヲ調査シタ、筆者モ之ニ參加シタガ捕獲ト檢定スル理由ニ乏シカツタノデ容疑人丈ケヲ抑留シ、二十六日「ボールス」號ヲ解放シタ。同號ガ敵人ノ輸送ヲスルト云フ情報ガ最初ニ吾々ノ手ニ入ツタノハ、兩回共我海外機關カラ來タモノデ無イコトヲ茲ニ告白スルノハ、頗ル遺憾デアルガ、敢テ此事實ヲ指摘シタ所以ハ、我牒報網ノ發達改善ヲ促サントスル微衷ニ外ナラヌコトヲ諒トサレタイ。

旅大租借等ノ期限延長

大正四年日支交渉ノ經緯詳シク「加藤高明」傳中ニ載セラレテ居ルカラ、之レヲ省略スルガ、此交渉デ我國ノ最モ重キヲ置イタ案件ハ、云フ迄モ無ク旅大租借ト滿鐵及安奉線ノ期限延長問題デアル、加藤伯ガ此事件解決ノ必要ヲ深ク念頭ニ持ツテ居タコトハ既ニ「ポーツマス」條約締結後ノ北京談判ノ時カラデアルガ、其後桂内閣ノ外務大臣トシテ入閣スル爲英國ヲ去ルニ當リ、大正二年一月本件ニ付「グレイ」外相ノ諒解ヲ取付ケタ時述ヘテ居ル樣ニ、關東州ハ日清戰爭ニ依ツテ一旦我國ノ有ニ歸シ、日露戰爭ノ結果偶々日本ヲシテ其既ニ一度ビ獲得シタモノヲ回復サセタニ過ギヌノデ、同地ニ永遠占據スルノ決心ハ帝國臣民ノ腦裏ニ堅ク凝結シテ居ルカラ、其遂行ハ我國不變ノ國是デ、如何ナル内閣ト雖モ本問題ニ關スル限リ其方針ハ常ニ同一デアル。卽チ加藤外相ハ何人ガ何時カハ爲サネバナラヌ懸案ヲ解決シタ迄デ、我國トシテハ諸外國特ニ相手

國タル支那ヲシテ之レニ關シ錯覺ヲ起サセテハナラヌ。又支那國民トシテモ苟モ常識ヲ有スル者ハ這般ノ消息ヲ能ク理解シ得ベキ筈ダ。然ルニ徒ラニ虛勢ヲ强ツテ無智ノ民衆ヲ唆嗾スルハ、啻ニ中華民國ノ爲メニ益スル所ナキノミナラズ、早キニ迨ンデ之レヲ補正スルニ非ザレバ、勢ノ赴ク所遂ニ不測ノ難ヲ釀スニ至ルナキヤヲ虞ル、筆者ハ大正十五年ノ春支那各地ヲ巡遊シテ深ク此危惧ヲ印象付ケラレタカラ、愛國者爲政家ヲ以テ任ジ居ル支那ノ諸名士ニ對シテ右ノ忠言ヲ呈シ其反省ヲ促シタノデアルガ、此危惧ガ年ト共ニ益々擴大シタノハ誠ニ遺憾デアル。

曾テ明治四十四年十月民國成立ノ前提タル革命ノ烽火ガ支那ニ揚ツタ時、我國デハ桂内閣倒レテ西園寺内閣之レニ代ツタガ、時ノ外相内田子爵ガ閣議ニ提出シテ其決定ヲ經タ對支政策ノ根幹ハ、我國是ヲ能ク表明シテ居ルト思フカラ、是レヲ左ニ揭ゲル。

帝國ガ政治上並ニ經濟上清國トノ間ニ極メテ密接ナル關係ヲ有スルニ鑑ミ、帝國ニ於テ常ニ同國ニ對シテ優勢ナル地位ヲ占メンコトヲ努メ、併テ滿洲ノ現狀ヲ永遠ニ持續スルノ策ヲ講ズベキコトハ、前内閣在職中廟議ニ於テ既ニ決定セラレタル所ナリ。

滿洲ニ於ケル租借地ノ租借期限ヲ延長シ、鐵道ニ關スル諸般ノ問題ヲ決定シ、更ニ進デ該地方ニ對スル帝國ノ地位ヲ確定シ、以テ滿洲問題ノ根本的解決ヲ爲スハ、帝國政府ノ常ニ劃策ヲ怠ルベカラザル處ニ屬シ苟モ機ノ乘ズベキアラバ是レヲ利用シ、此斷案ヲ下スノ手段ヲ講ズベキハ論ヲ俟タザル次第ナル所、關東州ノ租借ニ關シテハ旅順及大連灣ノ租借條約第三條末段ノ規定アリ、租借期限滿了後延期ノ商議ヲ爲スハ

條約上既ニ之レヲ豫見セル次第ナルノミナラズ、滿洲ニ關スル北京協約第十二條ニ依リ、帝國ハ租借地ニ關シテモ亦最優待遇ヲ受クベキコトトナリ、露國政府租借期限延長ノ問題ハ我ニ於テ條約上根據ヲ有スル事項ニ屬スルヲ以テ、滿洲ニ關シテハ暫ク現狀ヲ維持シテ之レガ侵害ヲ防ギ、傍ラ此機ニ際シテ漸次我利權ヲ增進スルコトヲ努メ、滿洲問題ノ根本的解決ニ至リテハ、其機會ノ最モ我ニ利ニシテ、且ツ其ノ成算十分ナル場合ヲ俟チテ、始メテ之レヲ實行スルヲ得策ナリト思考ス。

飜テ支那本部ニ對スル帝國ノ關係ヲ見ルニ、在留帝國臣民ノ多キ。我通商貿易ノ大ナル、將又我ニ於テ關係ヲ有スル企業ノ增加シツツアル帝國ガ、此地方ニ於テ地歩ヲ占ムルノ機運ハ既ニ顯著タルモノアリ、加ルニ清國ニ於ケル事態ハ極メテ安靜ヲ缺キ、今後ノ形勢如何ハ何人モ之レヲ豫知スルヲ得ザルモノアリ、而シテ一旦不測ノ變ノ此地方ニ起生スルニ當リ、之レニ對シテ應急手段ヲ講ジ得ルモノ、帝國ヲ擱テ他ニ之レヲ發見スルコト能ハズ、此事實ハ帝國地理上ノ位置並ニ帝國ノ實力ニ照シ、更ニ疑ヲ容ルベカラザル所ニシテ一面帝國ノ東亞ニ於ケル一大任務モ亦之レニ存スルモノト云ハザル可ラズ、帝國ハ今後自カラ如上ノ地位ヲ確認シ、且ツ之レヲ確立スルコトヲ努メザル可カラザルノミナラズ、清國並ニ列國ヲシテ漸次之レヲ承認セシムルノ方策モ、亦今ヨリ是非共之レヲ講ゼザル可ラズ、而シテ列國ニシテ深ク東亞ノ大勢ヲ考慮スルニ於テハ、遂ニ我優勢ナル地位ヲ認ムルニ至ルベキコト、必ズシモ望ミナキニアラズト思考シ。

右樣ノ次第ニ付帝國政府ニ於テハ滿洲問題ノ根本的解決ハ、一ニ我ニ最モ有利ナル時期ノ到着ヲ待ツコトトシ、今後特ニ力ヲ本部ニ扶植スルニ努メ、併セテ他國ヲシテ該地方ニ於ケル我優勢ナル地位ヲ承認セシ

ムル方法ヲ執ルコトトシ、帝國政府既定ノ方針ニ基キ、一方滿洲ニ關シ露國ト歩調ヲ一ニシテ我利益ヲ擁護スルコトヲ計リ、他方出來得ル限リ清國ノ感情ヲ融和シ、彼ヲシテ我ニ信賴セシムル方策ヲ執ルノ外、英國ニ對シテハ飽迄同盟條約ノ精神ヲ徹底スルコトニ努メ、其他佛國ノ如ク支那本部ニ利害關係ヲ有スル諸國トノ間ニ調和ノ途ヲ講ジ。且ツ出來得ル限リ、米國ヲモ我伴侶ノ內ニ收ムル策ヲ取リ、以テ漸次我目的ヲ達センコトヲ期ス。

大正四年日支交涉ト山東還附

支那ガ甚ダシイ錯覺ニ基イテ滿洲問題ヲ論議シテ居ルト同ジク、山東問題ニ付テモ其考エ方ガ常軌ヲ逸シテ居ル、思フニ之レハ俗ニ謂フ橫車ヲ押シテ居ルニ過ギヌノデ、主張スル當人デサヘ其非理ハ能ク會得シテ居ルコトト信ズルガ、支那ハ連リニ大正四年ノ交涉ハ日本ガ取ツタ丈ケデ吳レタモノハ何モ無イ、斯クノ如キ國際商議ハ先例ノ無イコトデ無法千萬ダト高調シテ居ル。然シ之レハ事實ヲ僞ルノ甚ダシイモノデ、日本ハ支那ノ與ヘタ諸權利ノ對償トシテ山東還附ヲ約束シタノデアル。獨逸ガ我通牒ヲ聽キ容レズニ干戈相見ユルニ至ツタ以上、通牒ニ書イテ在ル要求ハ先方ガ蹴ツタノダカラ消滅シタコト勿論デ、其結果山東攻圍戰ヲ餘儀ナクサレタノダカラ、之レガ爲メニ蒙ツタ人的及金的犧牲ニ對シ、戰勝者トシテノ日本ガ補償ヲ求ムル權利ノ在ルノハ言フ迄モ無イ、從テ山東ニ獨逸ノ持ツテ居タ權益ノ繼承ヲ日本ガ要求シ得ルノハ當然デアル、此繼承權ヲ拋棄シタノガ對價デ無クテ何デアラウ。大正三年八月加藤外相ガ「グリーン」大使ニ我勸告ガ獨

逸ニ一蹴サレテ干戈相見ユルニ至レバ、膠州還附ノ保障ヲスルコトハ出來ヌ、假リニ同地ヲ支那ニ返ストシテモ之レニハ相當ノ條件ヲ附ケネバナラヌ、其中ニハ例ヘバ旅大租借地、南滿鐵道等ノ處分ニ關スル如キコトモアルダラウトテ、前ニ書イタ英國離任ノ際「グレイ」外相ニ話シタ事等ヲ内話シタ、此報告ヲ受取ツタ「グレイ」外相ハ八月二十一日「グリーン」大使ニ打電シテ加藤外相ノ主張ヲ當然ダト云ヒ越シタガ、其一節ハ左ノ通リデアル。

英國出發間際ニ加藤男ト遼東半島ノ件ニ關シテ交換シタ會話ヲ余ハ能ク記憶スル、又日本ガ血ト金トノ出捐ノ對價トシテ條件ヲ附スルヲ必要ト認ムルコトニ付テモ、余ハ全然同感デアル。

「グレイ」外相ハ更ニ大正五年一月三十一日井上大使ニ對シ、戰局ガ聯合軍ノ勝利ニ歸シ獨逸ニ講和條件ヲ指命スル場合、獨逸ガ支那ニ於テ有スル權利ノ繼承ニ關シ日本ヨリ支那ニ要求スルモ、英國ハ毫頭異存ハナイト云ヒ、膠州灣ノ處分權ガ全然我掌中ニ在ルコトヲ認諾シタ。

日本カラ見レバ山東ヨリモ滿洲ノ方ガ遙カニ大切デアル、旅大ノ租借並ニ滿鐵及安奉線ノ期限延長問題ハ、前記ノ通リ國策上何時カハ之レヲ解決セネバナラヌノデ、我ハ好機會ノ到來ヲ待ツテ居タニ過ギヌ、恰モ青島ガ我ガ手ニ入ルコト確實ト成ツタカラ、我ニ取リ比較的重要價値ノ少ナイ青島ヲ支那ニ提供シテ、滿洲問題ノ圓滿解決ヲ期シタ。膠州ハ獨逸ガ九十九年ノ期限デ支那カラ租借シタ土地デ、國際法學者ハ誰デモ九十九年ノ租借ヲ割讓ト同一視スベキダト云フテ居ル、獨逸デモ自分ノ所領ト考ヘテ保護領ト稱シ、植民地ト同ジ取扱ヲシテ居タガ、巴里講和會議モ該租借地ハ獨逸海外所領ノ一部ヲ爲スモノト看做シ、之レヲ基點トシ

テ同地ニ在ル公有財産ノ處分ニ關スル對獨回答ヲ認タタメ、獨逸モ亦此解釋ニ異議ヲ挿マナカツタ、卽チ膠州租借地ハ獨逸ノ海外領土デ、極東將來ノ和平ノ爲メニ日本ガ攻略シタノデアルカラ、戰勝ノ際我國ガ之レヲ取得スルノハ誠ニ當然ノコトデ、何ノ不思議モ無イ、此戰果ヲ日本ハ滿洲問題解決ノ對價トシテ支那ノ爲メニ拋棄シタノハ非常ナ犧牲ヲ拂ツタノダト云フ根本義ヲ忘レテハナラヌ。

我講和基本條件ノ豫諾

大正六年一月英國カラ獨逸潛水艇監視ノ爲メ我軍艦二隻ヲ希望峰方面ヘ、又水雷戰隊一隊ヲ「マルタ」方面ヘ派遣シテ呉レヌカト懇望シテ來タ、我國デハ前年ノ十月ニ寺内伯ガ大隈侯ニ代ツテ内閣ヲ組織シ、本野子爵ガ外相ノ椅子ニ就イタ。寺内内閣ハ英國政府ノ右ノ懇望ニ應ズルコトニ廟議ヲ決シタガ、是迄未ダ何等ノ豫諾モ取附ケテ居ラヌ我講和基本條件ヲ、此際英國ニ認メサセテ置クノガ萬全ダト考ヘタ、本野外相ハ東京ト倫敦デ同時ニ交渉ヲ開イタラ、二月十六日在京英國大使カラ左ノ公文ヲ送致シテ來タ。

以書翰致啓上候陳者客月二十七日閣下ト會談ノ砌リ、閣下ハ追テ講和會議開催ノ場合ニ、山東ニ於ケル獨逸ノ諸權利、並ニ赤道以北ノ諸島ニ於ケル獨逸所領ノ處分方ニ關シ、日本ノ提出スル要求ヲ英國政府ニ於テ支持スベキ旨ノ保障ヲ得ラレ度趣、日本帝國政府ノ希望ヲ御開陳相成候處、本使ハ今般本件ニ關シ英國外務大臣ノ訓令ニ基キ、左ノ通リ英國政府ヨリ來示ノ次第ヲ、閣下ニ通報スルノ光榮ヲ有シ候。

英國政府ハ講和會議ノ際、山東ニ於ケル獨逸ノ諸權利、並ニ赤道以北ノ諸島ニ於ケル獨逸ノ所領ニ關シ

日本ノ提出スル要求ヲ支持スベキ旨ノ保障ヲ得ムトスル日本ノ希望ニ對シ、茲ニ欣然應諾ノ意ヲ表ス。

尤モ右ハ他日講和ノ場合ニ、赤道以南ノ獨逸領諸島ニ對スル英國ノ要求モ亦日本政府ニ於テ同一ノ精神ヲ以テ之レヲ迎フベキコトノ了解ニ基クモノトス。

右申進旁本使ハ茲ニ重ネテ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候　敬具

是レニ對シテ本野外相ハ二月二十一日左ノ回答ヲ送ッタ。

以書翰致啓上候陳者山東ニ於ケル諸權利並ニ赤道以北ノ諸島ニ於ケル獨逸ノ所領ニ關シ、貴國政府ニ於テ講和會議ノ際帝國政府ノ提出スベキ要求ヲ支持セラルベキ旨保障ヲ與ヘラレタル本月十六日附貴翰致閲悉候　帝國政府ハ貴國政府ガ右保障ヲ與ヘラレタル友好ノ精神ヲ深ク諒トシ、兩同盟國ヲ結合スル鞏固ナル交誼ノ新憑證トシテ欣懷ニ堪ヘザル所ニ有之候。尚ホ貴國政府ガ赤道以南ノ諸島ニ於ケル獨逸ノ所領ニ關シ、講和ノ際提出セラルルコトアルベキ要求ニ付テハ、帝國政府ニ於テ欣然同一ノ精神ヲ以テ之レヲ支持スルニ躊躇セザルベキコトヲ茲ニ言明致候。

右貴答旁本大臣ハ茲ニ重ネテ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候　敬具

英國ノ豫諾ヲ取付ケタ本野外相ハ、更ニ露佛カラモ同樣ノ保障ヲ得テ置ク爲メニ、二月十九日左ノ如キ同文ノ覺書ヲ駐日露佛大使ニ送ッタ。

帝國政府ガ獨逸ニ提出セムトスル講和條件ニ關シテハ、此種ノ問題ハ追テ講和商議開催ノ時ニ至リ、聯合諸國ト帝國トノ間ニ協議決定セラルベキモノナリトノ考量ニ基キ、帝國政府ハ未ダ正式ニ之レヲ聯合諸國

ト議スルコトトナカリシナリ。

然レドモ時局發展ノ近狀ニ鑑ミ、且「ボスフォール」君府「ダーダネルス」處分ニ關スル協定ノ如キ講和條件ニ關係アル特別ノ取極ガ、關係諸國間ニ既ニ成立セルニ至レルニ依リ、帝國政府ハ帝國ニ取リ主要ナル或種ノ講和條件ニ關シ、均シク其希望條件ヲ開陳シ、之レニ對スル露（佛）國政府ノ考量ヲ求ムルノ時機、今ヤ到達シタルモノト思考ス。

露（佛）國政府ハ帝國政府ガ現戰役ニ於テ其任務ヲ完了スル爲メ、並ニ東亞ノ平和及帝國ノ安寧ヲ永遠ニ保障スルニハ、極東ニ於ケル獨逸ノ政治上、軍事上及經濟上活動ノ根據地ヲ除去スルコト絶對ニ必要ナルヲ以テ、之レガ爲メ特ニ盡シタル帝國ノ全般ニ亘レル一切ノ努力ヲ諒悉セラルベシ。

仍テ帝國政府ハ講和商議ノ際、山東省及赤道以北太平洋ニ存スル獨領諸島ニ於テ戰前獨逸ガ所有シタル領土權並ニ特殊利益ノ讓渡ヲ、獨逸國政府ニ要求セムトス。

帝國政府ハ露（佛）國政府ニ於テ右要求ノ正當ナルニ顧ミ、帝國政府ガ本問題ニ付露（佛）國政府ノ充分ナル支持ヲ期待シ得ルノ保障ヲ與ヘラレムコトヲ希望ス。

敵國ノ不法ナル攻擊ニ依リ帝國臣民ノ蒙リタル生命及財產上ノ損害補償、其他聯合諸國間全般ニ共通ノ性質ヲ有スベキ講和條件ハ、全然本件考量ノ外ニ屬スルコト勿論ナリトス。

佛國大使カラハ三月一日左ノ回答覺書ガ來タ。

共和國政府ハ講和商議ノ際日本ノ爲メ重要ナル山東省及赤道以北太平洋ニ存スル獨領諸島ノ問題ヲ決定ス

ル爲メ、日本政府ニ對シ援助ヲ與フベキコトヲ約ス、而シテ佛國政府ハ戰前獨逸ガ前記支那地方及諸島ニ於テ保有セシ諸權利ノ讓與ニ關スル帝國政府ノ要求ヲ支持スルコトニ付、均シク同意ヲ表ス。

「ブリアン」氏ハ支那ヲシテ獨逸トノ國交ヲ斷絶セシムル爲メ、帝國政府ニ於テ援助ヲ與ヘラレ、支那ガ右國交斷絶ヲ望マシキ程度ニ充分勵行セムコトヲ切望ス、同氏ハ其結果下ノ如クナルベシト思考ス。

一、獨逸ノ外交官及領事官ニ旅券ヲ交付スルコト。

二、獨逸國民ノ支那領土退去ヲ强制スルコト。

三、港灣內ニ遁竄セル獨逸船舶ヲ差支ヘ、伊太利及葡萄牙ノ例ニ倣ヒ聯合國ノ處分ニ委スル爲メ、後日之ヲ徵發スルコト。佛國政府ノ接受セル報道ニ依レバ、支那港灣內ニ存スル獨逸船舶ハ十五隻ニシテ、其噸數約四萬噸ナリ。

四、支那ニ設ケラレタル獨逸商店ノ差押。

五、獨逸ガ支那諸港ニ於テ保有セル租界ニ對スル同國ノ權利ノ廢棄。

露國ノ回答ハ三月五日ニ屆イタ、卽チ左ノ通リデアル。

客月十九日附日本外務省ノ覺書ニ對スル回答トシテ露國大使ハ、山東ニ於ケル獨逸ノ權利及赤道以北太平洋ニ於テ日本軍ノ占領セル獨領諸島ノ割讓ニ關スル日本ノ要求ニ付、露國ノ支持ヲ期待シ得ベキコトノ保障ヲ日本國政府ニ致スベキコトヲ委任セラレタリ。

伊太利ニ對シテハ三月二十三日伊集院大使ガ外務大臣ニ面會シテ、前記英佛露ノ保障ヲ得タル旨ヲ報ズルト

同時ニ、伊國政府ニ於テモ右協定ノ締結ヲ滿足ヲ以テ迎フベキヲ確信スルコトヲ述ベタ覺書ヲ讀ミ上ゲタラ外相ハ本件ニ關シ伊國政府ハ毫モ異議ナシト答ヘタ。

米國ハ二月二日ニ獨逸ト國交ヲ斷ツタガ、此時ニハ未ダ交戰狀態ニハ入ツテ居ラヌ、米國ノ宣戰ハ四月六日ニ發セラレ、其秋石井子爵ガ特派大使トシテ渡米シ、夫ノ石井「ランシング」協定ハ成立シタガ、此事ニ付テハ講和會議ニ關聯シテ山東問題ヲ研究スル機會ニ讓ル方ガ適當ダト思フカラ今ハ述ベヌ。

支那ノ對獨斷交及參戰

支那ヲ獨逸ト斷交サセ又ハ聯合國側ニ參戰セシメントスル策動ハ、屢々英露佛カラ試ミラレタガ、日本ガ乘氣ニ成ラヌノデ實現サレナカツタ。我國トシテハ參戰ノ結果支那ガ講和會議ニ參加スル樣ニ成ルト、極東問題モ上程セラレ、戰爭ニ關係ノ無イ事迄論議サレル虞ガアルカラ、之レハ却テ東亞ノ平靜ヲ亂ス基イテ、斷交又ハ參戰ノ爲メ獨逸ノ商權其他ヲ支那カラ驅逐スル利益ニ比較シテ權衡ガ取レヌト云フノガ當局ノ見解デアツタ。然ルニ本野子爵ハ駐露大使時代カラ熱心ナ支那引入論者デ、今外務ノ椅子ニ据ハツテ居ル、ソコヘ佛國カラ我講和基本條件承認ノ對價ト云フ譯デモ無イガ、三月一日附覺書ノ樣ナ提議ヲシテ來タカラ、我國ノ方針モ以前ト異ツタ傾向ヲ示シテ來タノハ已ヲ得ヌコトデ、三月十四日支那ハ獨逸トノ國交ヲ斷絶シ、八月十四日ニ宣戰ヲ布告シタ。支那ガ講和會議ニ參加ノ希望ヲ表明シタノハ既ニ大正四年日支交涉ノ當時カラヾアルカ、其意圖ノ何レニ在ルカハ見エ透イテ居ル。愈々斷交サセルニ就テハ「ヴエトー」ノ權ハ日本ガ握

ツテ居ルノダシ、又斷交スル以上自然講和會議ニモ參加スルコトト成ルダラウカラ。山東問題ハ全部我ニ委ネテ口ヲ出サヌト云フコトヲ條件トシテ、斷交ニ同意スル樣ニセヌト、悔ヲ後日ニ殘ス虞ガアルト思ヒ、筆者ハ三度口ヲ極メテ之レヲ進言シタガ、本野外相ハ山東問題ハ最早英佛露伊トノ間ニ解決サレテ居ルカラ、夫レニモ拘ラズ日支條約ノ效力ニ付テ支那ニ口ヲキカス樣ナ事ガ在ツテハ日本ノ破滅ダ、世界ニ於ケル我國ノ地位ニ鑑ミ斯クノ如キ事態ガ起リ得ルトハ思ハヌガ、若シ起ラセル羽目ニ陷ラネバナラヌ事ニ成ツタラ、其事自體デ我國ノ地歩ハ失ハレルノデ、餘計ナ心配デアル許リデ無ク自ラ日本ヲ輕侮スルモノダト反駁サレタ。其所論ニモ一應ノ理ハアルガ、加藤外相時代カラ支那引入反對論ノ先鋒ニ立チ、此種ノ危惧ヲ絶エズ抱イテ居タ筆者ハ、或ハ先入主ト成ツタ偏見ニ累セラレテ居タノカモ知レヌガ、何ントナク氣ニ成ツテナラヌノデ外相トハ赤ノ他人デハナシ寺内伯ハ同郷ノ先輩デ役人トシテ以外ノ關係モアルカラ、寺内首相ニモ前記ノ危惧ヲ縷陳シタガ、遂ニ此保障ガ取付ケラレズニ終ツタノハ、返ス返スモ殘念デアル。

第二十二章　我國ノ講和準備

講和準備委員會ノ構成ト事業

大正三年十月加藤外務大臣カラ講和準備ノ爲メニ必要ナ材料ノ蒐集調査ヲスル樣内命ニ接シタ筆者ハ、欣然之レヲ快諾シテ早速其研究ニ着手シタ、然シ獨リデハ何分ニモ手不足デ困ツテ居タラ「ブルツセル」ヲ引揚當時獨逸軍ニ拘禁サレタ木村書記官ガ翌年三月歸京シタカラ、同書記官ノ協戮ヲ得テ八月二十六日一應ノ調査ヲ終ツタノデ、正式ニ委員會ヲ設ケテ研鑽ヲ續ケタ、其顚末ハ大正五年十二月幣原委員長カラ本野外務大臣ニ提出シタ報告書ニ詳細記シテアル、此報告書ハ相當長文ダガ、我政府ガ講和ノ用意ニ腐心シタ一班ヲ紹介スル爲メニ左ニ之レヲ掲ゲル。

一　設立ノ趣旨

大正三四年役ハ青島陷落、獨逸東洋艦隊殄滅ト共ニ、帝國ノ關スル限リ實際ノ戰鬪一段落ヲ告ゲタルヲ以テ、豫メ歐洲大戰爭後ノ講和ニ關シ、各種ノ事項ヲ調査研究シ置キ、形勢一變何時講和會議ノ開カルルアルモ、違算ナカラシムルノ準備ヲ爲スノ要アリトシ、大正四年九月十日大隈外務大臣ハ外務省内ニ日獨戰役講和準備委員會ヲ設ケ、外務、陸軍、海軍ノ三省及法制局員中ノ諸員ヲ以テ委員ト爲シ、該委員會ノ調査ノ方針ヲ定メ、講和ニ關スル一切ノ事項ヲ攻究シテ、講和會議ニ對スル準備ヲ爲スヲ目的トシ、事帝國